

「共感は、内容についてではなく、そうした存在の震えにこそ向かう。」

高校教師になって最初に赴任したのがいわゆる「教育困難校」。しかも、その学校でも最も「しんどい」といわれたある3年のクラスの授業を受け持った。最初の3週間は全く授業ができなかった。これまで培った人に自慢できるほどの量がない力を出しきって、なんとか授業の出来る状態にした。授業の出来る状態といっても、教師の声に静かに耳を傾け、教師が黒板に書くこと（板書）もきちんとノートに写す、という状態からは程遠く、耳を傾け板書も写すという生徒は少数で、板書は写すが耳は傾けない（隣同士で喋っている）、耳は傾けているようだが板書は写していない（そもそもノートを買っていない）、耳も傾けないし板書も写さない、という生徒が多数で、いわゆる騒がしい状態で、声を張り上げれば教室の後まで教師の声がなんとか届く、という状態であった。

こんな中で1年間、授業をやり遂げたが、不思議なこと（疑問）が2つあった。1つは、こんな騒がしい授業を受けているのに定期考査の平均点がいつも50点ぐらいあったこと（決して、まるっきり勉強していなくても50点ぐらいはとれるというテストではない。そこそこ勉強しなくては50点ぐらい取れない程度のテストである）。もう1つは、定期考査の平均点がいつも50点ぐらいあったこともあるが、教師の私自身が、こんな騒がしい状態でしか授業できなかったにもかかわらず、虚しい気持ちにはならず、それなりの充実感があったことである（もちろん、疲労感も大きかったが）。

こんな不思議なこと（疑問）を感じていた、3年生が卒業して数日たったころ、くだんのクラスで耳も傾けないし板書も写さない生徒であった卒業生と学校の近くで偶然出会った。彼は、そのクラスのナンバー2の「ワル」であり、私は少し緊張した（ちなみに、そのクラスのナンバー1の「ワル」は、1人で数人の不良と喧嘩して勝ったという伝説を持つプロレスラーのような体格の生徒だった）。しかし、私が勤務していた学校の在学中の「ワル」は卒業すると、例外も少しあるが多くは礼儀正しい青年に変わるのが常で（これはこの学校の教育方針が正しいことを証明している）、彼もまた、礼儀正しく挨拶をしてくれて別れようとした。別れ際、彼は思いがけないことを私にいった。その言葉は、私にとって一生の宝となる言葉だった（こんな言葉を数日前までの「ワル」がすっといえることを知って以来、高校生は「純真（純心）な幼児おきなご」と「賢明な大人」を併せ持つ存在と思うようになっていった）。どういう言葉だったかは記さないが、ただ、「（先生の授業の内容についてはともかく）先生の授業をする姿に好感をもっていた」という意味をも含む言葉だった。その言葉を聞いて、疑問の1つであった「それなりの充実感があったのはなぜか」の答が分かった。そして、その後、彼がなぜそのように感じてくれたのかを考え続け、別の学校に転勤したのち、その答も分かった。

そんなことがあって何年も経た一昨日（15.9.19）、下記の、折々のことば「共感は、内容についてではなく、そうした存在の震えにこそ向かう。」を読んで、私の体験したことは普遍的なことだったということを確認した。

折々のことば

鷲田 清一 167

ただザワザワとざわめいているだけでいいんだよ。はっきりとした音をお前から聞きたいなんて、思っていないのさ。

R・ボルヒャルト

「耳を澄ましたりすれば、きっとお前も痛いだろうから」と続く。お前の解釈を聴きたいのではない。お前があがいていること、ぶるぶる震えていることを、そっと知っていたいのだ。共感とは、内容についてではなく、そうした存在の震えにこそ向かう。アドルノ「三つのヘーゲル研究」（渡辺祐邦訳）で引かれた詩「休止」から。

<関連>

言葉以上の言葉 (<http://c1.cocolog-nifty.com/blog/files/17.pdf><クリックして下さい>)

大切なのは、何をしゃべるかということではなくて、なぜしゃべるのか、ということなのさ。

そこを汲くんでやることだよ！<ゴースキー「どん底」(神西清訳) 作中人物の言葉>

「おはよう」「ゲンキー？」というふうに、挨拶ではほとんど内容のない語をやりとりする。挨拶においては、問われていることがらよりも、自分がだれかに問い、問われているということそのことに意味があるからだ。

～折々のことば (<http://pdffile.cocolog-nifty.com/blog/files/71.pdf><クリックして下さい>) より～